

記憶の海辺

(地の文はUser01 シュウ、台詞はそれぞれのプレイヤーが読み上げてください)

まぶしい。

波の音が耳の奥でゆっくりと揺れていた。

空は白く海と空の境目が曖昧だ。

さっきまで葬儀場にいたはずだ。

線香の匂いも差し出された黒い傘の影も、もうない。

確かにそこにあったはずなのに。

となりにはミナが座っていた。

ミナ「気分はどう?」

シュウ「夢を見るみたいだった」

ミナ「夢とは少し違うの。兄さんの神経スキャンデータを基に、システムが再現した“記録”だから」

シュウ「記憶の……再構成?」

ミナ「うん。Memory Shell(メモリーシェル)は脳の記憶の残響を読み取って、

失われた時間を再生する仕組み。

今見た葬儀も迎え入れも、兄さんの中に残っていた断片から生成された映像なの。」

Shellは貝殻の意味だったっけか。いつかのミナの言葉を思い出す。

僕は足元の砂を握った。指の間からこぼれ落ちる粒は確かに温かい。

シュウ「これも……映像なの? 触った感覚もあるけど」

ミナ「そう。触覚も温度も匂いも神経信号を模倣したもの。ここは仮想世界だけど、私たちの脳には現実と区別できないようにできる。」

シュウ「じゃあ、僕は今、どこに?」

ミナ「現実の兄さんの身体は、研究所のニューロリンク室で眠ってる。私の隣にね。」

シュウ「研究所……？」

そう言わると僕の脳裏に、MemoryShellに接続する直前の光景が蘇る。

真っ白な部屋に鎮座する見慣れない大型の機械。あおむけに寝そべる僕。

横を向けばミナがこちらを見ていた。僕を安心させるように、笑顔でうなずいていた。

ミナ「……ダイブの影響で、短い記憶の空白ができるのかもしれないね。」

そうだ。このシステムはミナが設計した。

僕もミナも高校のときのある夜の記憶がない。

あの夜、僕を引き取ってくれた義理の両親は何者かの手によって殺害されているのだ。

あまりのショックによる記憶喪失とされたが、犯人は未だに捕まっていない。

ミナ「落ち着いて。すぐに思い出せると思う。

これは兄さんと私が、過去を“追体験する”ための実験なの。

今から私たちは順番に、一緒にあの夜を思い出していく。」

シュウ「……思い出すために、こんな島を？」

ミナ「ここを選んだのは兄さんの記憶だよ。四季音島。家族旅行で行った島だね」

風が少し強くなり、彼女の髪が頬をかすめた。

遠くでウミネコが鳴いた。

シュウ「ミナ……これは本当に俺の記憶なのか？ それとも君が作った世界なのか？」

ミナ「二人で作ったというのが正しいね。

MemoryShellは“私たちの記憶の重なり”を再現する。

兄さんの過去と私の願いが今ここで混ざりあってる。」

シュウ「混ざる……？」

ミナ「確かめよう。あの夜、私たちは何を失い、何を守ろうとしたのか。」

波が寄せては返し、砂に残る二人の足跡をゆっくり消していく。

僕はその消えていく跡をしばらく見つめていた。

海風が一瞬、止んだ。

世界は静かに光に包まれていく。